# 【朝日新聞社主催のコンテストで佳作に選ばれました】

宮崎第一高等学校

朝日新聞社主催の「**私の折々のことばコンテスト 2023**」の受賞者が発表され、応募総数 27962 点の中から**文理科２年４組 原口 葵さん（加納中学校出身）**の作品が高校部門の佳作に選ばれました。

このコンテストは、自分の「心に響いた大切なことば」を挙げて、そのことばにまつわるエピソードを綴るというものです。

原口さんは、谷川俊太郎の「いのちはいのちをいけにえとしてひかりかがやく」ということばを取り上げました。俊太郎の本の帯に書かれていたこの言葉から、牛農家である友達から聞いた牛を売りに行く話を思い出し、「自分と同じ価値のいのちをいただいていることに感謝しながら生きたい」と綴ってくれました。

原口さん、おめでとうございます。

【私の折々のことばコンテスト】とは（HP より抜粋）

友だちや先輩、親や先生など、身近なだれかのひと言。
メールや LINE、手紙で、ふと心にとまったメッセージ。
本やテレビ、マンガにも、大切なことばとの出会いはあるはずです。
朝日新聞の朝刊コラム『折々のことば』では、哲学者の鷲田清一さんが毎日一つのことばを取り上げ、やさしく深く読み解きます。
「私の折々のことばコンテスト」は、あなた自身の心に響いた「ことば」を探し、その思いを書くことで、自分にとって大切なものは何かに気付く、そんなきっかけを願うコンテストです。

**佳作（高校部門）**

**宮崎第一高等学校（宮崎県） 2年**
**原口（はらぐち） 葵（あおい）**

## いのちはいのちをいけにえとしてひかりかがやく

**谷川俊太郎**

私はある日あの絵本を読んでから、食べることに関して感謝し始めた。谷川俊太郎さんが書いた、「しんでくれた」という本の帯の「いのちはいのちをいけにえとしてひかりかがやく」という言葉がきっかけだ。美郷町に引っ越した小学五年生の時に出会ったその友達の家は牛農家で、自分が愛情こめて育てた牛を売りに行く話をしてくれた。私はこの時いつも牛肉を食べるときにただ「いただきます」だけ言って何も感謝してない自分に腹が立った。その時にこの本を読み、さらに自分の行動をふり返り、見直すことにした。私達が簡単に買って食べているお肉は私達と同じ価値のある命だ。その一つの命を無駄にすることがないよう感謝して生きて、生きたい。

出典
谷川俊太郎「しんでくれた」の帯に書かれていた言葉より